

中国に於ける近代革命思想の発達と清朝の滅亡について

堀 一 勇

清朝末期に於ける中国からの海外留学生のうち殊に日本へ留学せる者の多くは母国の実情を憂うるの余り漸次革命思想を抱くに至った。これは彼我、同文同種であるとの自覚による中国留学生が当時の日本の潑刺たる空気に触れるにつけ自国の振わざるを想うての自然の勢であつて、彼等は暫てその本国にもその思想を伝播せしめることゝなつた。彼等は革命の第一歩として、清朝は倒さねばならないがその後の始末を如何にすべきかに苦慮した。明朝の復興はかねて漢人の抱ける願ひであり、「反清復明」の四字は久しく秘密結社の標語であつた。而し乍ら時勢は移り變つて明の復興もはや過去の夢となつた。立憲制を採用するにもその基礎がない。此の時恰も彼等の崇敬の的となつたのは孫文である。多数の留学青年の歩みが期せずして孫文と同一歩調となり革新の叫びが共和の要求となるのは洵に自然の成り行きであつた。同時に革命思想の鼓吹者として別に注目すべき人物は章炳麟である。彼は日本に於て革命思想を鼓吹し康有為・梁啓超等の保皇説に対して手痛き攻撃を加へつゝあつた。留学生達の革命思想が一種の示威運動を起しはじめたのは、ロシヤの徹兵問題が騒がしく、東亜の風雲漸く急ならんとする時であつた。而かもロシヤが期限を超えても撤兵しないことは中国の青年志士をいたく憤慨させた。然し力無き清国政府は、日本の対露交渉に依

存する許であつて何の行動も取り得なかつた。従つて留学生の間には強硬論を唱える者多く、義勇兵を組織する運動さえ興つた。彼等はそれを革命に使う下心もあつたとの事であるが、清国公使の干渉に依つてこの計画も遂に沙汰止みとなつた。要するに東京に於て留学生間に革命思想が発達すると同時に本國に於てもそれは漸次蔓延しつゝあつた。加之、湖南省に於て黃興の革命運動が計画せられたのも此の年の暮であつた。然しそれも亦、革命に先立つて發覺したために彼は一旦捕えられたが直ちに脱獄して日本へ亡命した。當時は中國から日本へ來れる留学生は實に多く、その間に革命思想は日に日に高まりつゝあつた時黃興は渡來したのである。彼の重厚なる人格は多數の留学生達の尊敬を集め、革命思想を抱けるものは彼を中心として組織ある運動を起せうとした。但し留学生間には康有為一派の保皇説を支持する者もあつて、彼等全体の大同團結を計るが如き企ては未だおこらなかつた。かゝる企てがおこり且つ実行せられる動機となつたものは孫文の再度の來日であつた。

孫文はさきに日本を去つて南中國に於て革命戰爭を興したこともあるが、機未だ熟せずために戦たちまち破れて海外に亡命した。彼は歐米の巡遊中にも常に己れの思想を宣伝し、資金の調達に努めつゝあつたが、日露戰爭おこるや亦日本に引かえした。孫文が黃興と相識るに至つたのはこの時である。兩人は一見旧知の如く只だ一夕の会談によつて固く相提携することゝなつた。暫て多くの留学生はこの兩人を戴いて中國革命同盟会を組織し、孫文はその總裁となり黃興は実行部長に選ばれ、(一)民族(二)民権(三)民生の三綱領を掲げて此の会の發展の方法も着々と講ぜられつゝあつた。右の綱領は孫文が年來の主張を要約したものであつて、民族(主義)とは、北京政府から離れて漢民族の自由を回復すること。民権(主義)とは、共和政治によつて直接民権を實行すること。民生(主義)とは、私有財産の節制等社会政策的立法を意味する。即ち中國を漢人の共和国とし國民均等の幸福を計ることがその主旨であつた。會員は

日に増し一年ならずして其の数一万人を超えるに至った。今迄の革命団体が何れも地方的なるに反しこれは殆んど中国全体を基礎とし背景として立ち上ったが故に、革命運動は始めて国民運動たらしめんとする緒を開き、従つてその実行準備は凡ゆる方面に行き亘りつゝあつた。後に一九一一年に至つて武昌の革命一度おこるや、天下の人々は之に応じ一朝にして清朝を崩壊せしめた所以である。

日露戦役は清国を刺戟して憲政運動を興さしめたのであるが、清国政府は先づ一九〇六年官制の改革の必要をかんじて、今までの軍機所、六部等の他に新に十部を設け更に一九〇八年には今後十年以内に憲法を發布し国会を開く可きことを約し種々の準備に着手した。而るにこの年十月皇緒帝並びに西太后相次いで崩御し宣統帝の即位となつた。皇緒帝ならびに西太后が殆んど同時に崩御された事については種々な意見があるがその真相は詳かでない。皇緒帝はその業績よりみて決して明君とは云えないがその不遇なる境遇に對しては時人から多くの同情を呼んでいる。西太后は既に老境に入つたとはいへ一種の女傑であつた丈けに尙お威望を備えていた。此の時宣統帝は僅かに三才であつてその父醇親王は摂政となつた。宣統帝の即位后袁世凱は拒けられて一時その故郷河南省に歸臥した。袁世凱の失脚についてその表面の理由として故郷に歸り足疾を養ふということであつた。彼は兩皇崩御以來足疾と稱していたが、一説に依ると彼は醇親王から何時刺客を遣わされるかわからない事を恐れ、足疾となえて杖を用い二人の護衛兵を左右にして宮廷に出入していた。偶々護衛兵より拳銃が発見せられるという事件があり、この事件のため醇親王の怒りをかいたために彼は遠ざけられたという。袁世凱の反服は曾て皇緒帝を悲慘なる運命に陥し入れた。帝の弟として多年暗涙をのんでいた醇親王は一度勢力を得た時袁世凱を其の儘にしてをかないことは既定の事実であつた。彼が足疾に托して杖を常用し護衛兵に拳銃を持たせて自衛の策に出た事も或いは事実かも知れないが、然しそれが發覺したため

に彼の失脚の運命が決まったのではなからう。彼は衷心より清朝に対し忠なる者とは評せられないが、その手腕より云えば彼は当代の第一人者であつて、彼の引退も亦清朝の威信を失墜させた。

一九〇九年に将来の国会の基礎たる資政院の細則發布せられ、次いで地方議會たる各省の諮議局も開設せられる運びとなった。翌年開かれた資政院は直に国会を開くべきことを強要し政府は一九一三年をもつて之を開くことを約し更に官制を改めて新たな内閣の組織を整え様々の改革を断行することゝなった。かくの如く政府が憲政の実施に努力していた間に他の一面には又微力な政府に対する不満も絶えず漢民族の反抗は様々の秘密結社となつて現われた。

是等の運動に最も力を添えたものは前にのべた孫文一派の革命運動家であつた。清国に於て列国の競走したる鉄道利権問題は中国人を覚醒すると共に、鉄道を自国人に依て經營せんとする者は固有論に反対し、遂にこれがために一九一一年五月四川省に於ては暴動すら惹起している。政府は暴動鎮圧のために湖北の軍隊に動員令を下した。この時に於ける人心の動揺は長く機会をねらつていた革命家の乗ずるところとなった。同年十月十日武昌の旅團長黎元洪は革命党と氣脈を通じ革命戦争の火蓋を切つた。これが第一革命の発端である。

革命軍は武昌、漢陽、漢口を直ちに其の手中に収めた。政府は討伐隊を遣わし、狼狽の余りに遽に思い付いて袁世凱を再び招き、彼を総理大臣として内閣を組織せしめた。勿論これには醇親王を始めとして相当反対もあつた。然しこの際にこの難局を処理すべき人物もなく止むを得ず彼の再起となつた。実に當時政府の頼みとせる北方軍閥に中堅たりし馮國璋、段祺瑞等有力なる將軍すら曾て袁世凱の配下たりし關係上、革命軍討伐の功を奏するには彼には恵まれた時機となつた。革命軍討伐の全權を委ねられた彼の起用は、彼に対する清朝の屈服であり、彼に兵馬の全權を

委ねたことは清朝自らを縊る繩を彼に与えた如きものである。革命軍は暫て武昌に軍政府を設けこれを中華民國軍政府と名付けた。始め普通の暴動に過ぎないと思われたものが以外にも天下を風靡して一ヶ月ならずして全国の三分の二は北京政府の命を用いざることゝなった。

これよりさき袁世凱は故郷に帰臥中ひそかに革命党と通じていたという。甚しきに至つては軍規大臣以前に既に孫文、黃興等と連絡を保つていたと云う者すらある。それは信じ難いとしても失脚後革命党と通じていた事は考え得る事である。然し彼は望を官界に絶つたのではなかった。彼は凡ゆる手段を考じ再起の機会をねらっていた。彼は一面清朝の味方となつて復活の準備を怠らなかつたと同時に、一面その敵となつて革命党を助ける計画をも進めていた。かゝるとき革命戦争の起つた事は彼にとってはまことに天来の福音であつた。河南の草廬を出て革命軍討伐の全權を委ねられたる彼はひそかに其の子袁克定をして漢陽の黃興に軍資金を供給せしめていたという。然かも自らは政府の代表者として巧みに革命党との妥協を試みることゝなった。武昌の軍政府はこれに應ぜず、革命党は共和制を採用し暫て軍政府を上海に移し更に南京に移すことゝなった。袁世凱が一方に於て講和を提唱し、他方に於て革命軍を助けた秘密は講和會議に於て革命党をして共和政体の採用、宣統帝の退位を主張せしめ己れは其の間を斡旋して大總統の地位を得ようとする野心に動かされたことであらう。

袁世凱はこの時妥協に破れて更に革命軍に痛撃を加える必要をかんじ、命を段祺瑞に下して猛烈に進撃せしめた。これがため漢陽は陥落した。漢陽陥落後彼は再び講和を提唱し遂に革命党の同意するところとなつた。この前後に於て彼は充分敵の一部と氣脉を通じつゝあつた。それは漢口にて開かれたる革命党の各省代表会が、袁世凱にして若し反省せば臨時大總統たらしむ可しと決議した事によつても知ることが出来る。

今迄南北いづれに対しても積極的態度を示さなかった日本は漸くこの頃に至ってイギリス及びロシヤと共に南北両政府の間を調停して休戦条約を結ばしめた。然し乍ら両政府はとかく意見が一致せずその間に摂政退職等の問題も起つて時局は愈々紛糾した。南京政府では偶々英国より帰国した孫文をむかえて臨時大總統となし独立の意志を表明した。翌一九一二年一月一日孫文は南京に行つて就任式を行い新政府を組織し、北京政府を倒して共和制採用のことを宣言し、諸外国に対してもそれを声明した。かくして大勢は日に北京政府に非となつた。一月末には宣統帝退位の問題も決し、袁世凱はその善後策に就いて南京政府と交渉を遂げ北京外交団に対してもこれ等の自由を通牒した。二月十二日清帝退位の詔が発せられたが、その詔中には、袁世凱に全權を委ね共和政府を組織せしめ南北統一の方法について革命党と協議せしめるとの意味が述べられてあつた。清朝はかくて十二代二九七年にして滅んだ。それと同時に孫文は臨時大總統の職を辞し一先づ南北は統一した。これは方しく南京政府は北京政府に対して一大譲歩を敢てなしたものである。恐らくこれも袁世凱と孫文との間に默契ありとみななければならない。

退位後の宣統帝はその一代の間大清皇帝の尊称を保つこととなり、民国政府はこれに四百万の歳費を与え帝室の財産は政府の手によって特別に保護されることゝなつた。この後多少の紛擾はあつたが三月十日袁世凱は統一臨時政府の大總統となり、第一革命は一段落つき共和制が全国に布かれた。

以上の如くして成立した東洋最初の共和国は、外には烈強の圧迫、内には財政の困難等幾多の難問題に苦しみながらも翌一九一三年には臨時約法に依つて国会成立し、日英米仏露の六ヶ国銀行団から約二億五千万の大借款も成立したので一時の急場をしのぐことを得たが、袁世凱の野心は自己の勢力安定のため漸次專政君主制的色彩強くなりために同年七月には李烈鈞の革命運動起るや各地に之に應ずる者多くして所謂第二革命は間もなく平定せられ、十月十日

袁世凱は国会の議決に基づいて任期五ヶ年の大總統となり中華民国はこゝに建國されることゝなった。